

---

金 田 憲 治

議長（村松 積） 次に、3番、金田憲治君、質問を許します。登壇願います。

金田憲治君。

3番（金田 憲治） 3番、金田憲治です。

私は、飯田下伊那地域が近い将来、高速交通体系のエリアに組み込まれる可能性が増している現実を踏まえ、下條村がより一層の発展のための事業化についての提案をし、村長のお考えをお伺いしたいと思います。

飯田下伊那地域の高速交通体系は、中央道の幕開けで始まりました。それに続いて、飯田市、浜松市を結ぶ三遠南信自動車道。これは山本天竜峡間の一部供用開始がさらに加速をさせております。しかしながら、民主党新政権の施策方針により、「凍結」という最悪の事態も予想される中、今年度予算付けがされ、厳しい状況ではあるものの、希望が持てる状況にありますので、推進の運動をより強力にしていかなければならないと、このように思っているところでございます。

また、さらに大都会との距離が一挙に解消されるというよりも、もう都会の一部にもなり得る地域の悲願であるリニア中央新幹線の飯田駅設置に向けての運動も、ようやく官民あげて推進体制ができ、5月には南信州広域連合が、リニア将来構想策定に向け始動し始めました。また、そういうことによって、誘致体制も整備されたところでございます。

6月4日、国土交通省交通政策審議会鉄道部会の小委員会で、ヒアリングを受けました長野県知事は、特定ルートを主張せず、審議会に姿勢を委ねる報道がありましたことによりまして、飯田駅設置の線が実現性を帯びてまいりました。

これらの高速交通網が整備されれば、時間的にも生活エリアも都会の中に組み込まれることになり、今までの生活習慣が相当変化していくことが予想されます。

5月8日に開催されたりニア中央新幹線飯田駅設置総決起大会での基調講演で、日本政策投資銀行の藻谷氏は、「新幹線で駅ができて豊かになった事例はなく、むしろ寂れていく」とし、「何も手を打たなければリニア駅が実現しても定住人口や観光客、工場立地などの増加はあり得ない」と冷静な事実認識を求められ、「そのような事態にならないため、少量生産、高単価の製品、商品開発、富裕高齢者や外国人向けの個人観光客、既存市街地への機能集中、こんなような対応が必要」との見解を示されたところでございます。

この総決起大会には、村長もパネラーとしていろいろご意見をされておりました。

その中央新幹線による飯田駅設置が身近になったわけでございますけれども、そうでなくても都市までの時間は年々だんだん短くなってきて、都市とのかかわりが大きくなってきております。そのため、魅力ある地域づくりが大きな課題であろうかと思っております。これ魅力ある地域づくりにはいろんな手法が考えられますけれども、私は2点について提案をしたいと思っております。

まず、第1点ですが、長期的視点に立った景観形成に向けての指針を作り、村民がその指針に向け地域ぐるみで取り組みをすることにより、美しい村を目指すことです。下條村でも国道沿いを中心に沿線の整備をされていますし、高齢者を中心に花を植えて美しい村づくりをされておりますけれども、地域の歴史や自然などと一体となった景観形成が図られたと思っております。景観には100年、また風土には1000年、そういうように長期間かかるということにも言われております。

次に、2点目ですが、基幹産業の農業環境は、従事者の減少と高齢化、そして農業総生産額の減少が進んでおり、農業の総生産額はこのごろ横ばいという数値も残っておりますけれども、全体的にはやっぱり減少があるというように思っております。

この農業の担い手確保が大きな課題となっております。一方、地域特産の干し柿や親田がらみの地域ブランドやこだわりの農産物への需要は、食の安全も相まって増してきているところが現実でございます。

農業に携わる農業従事者は減少しているものの、平成17年度で1,534人と依然として多くありまして、そのうち60歳以上の人口は586人、38.2%となって、高齢化の傾向はますますその比率が大きくなっていくものと推測されます。

今後、農業の担い手として一定以上の年齢層に頼らざるを得ない構造になってくるのではないかと思います。しかしながら、今までサラリーマンとして働いた者は、豊富な農業知識を持っていない者がほとんどだと考えられますし、また家庭農園に携わっている人もしかりだと思います。そこで農業に興味を持ち始める50歳代から定年退職者を中心として、基礎的な部分から、またこだわりの農業知識を学べるそういう研修会を実施されたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

これをお伺いいたしまして、質問いたします。

議長（村松 積） 伊藤村長、答弁願います。

村長（伊藤 喜平） お答えいたします。

最初に景観形成の推進についてということで、お話がありました。

今、下條村このことに積極的に取り組んでおるところでございまして、今年も美的景観だとか、それから一番問題は、生活に支障のあるような景観を景観だ景観だといって残すことは私は反対でございます。最小限、今実際その地でそこで生活をする人が利便性に欠けるようなことがあってはいけないということで、そのことに十二分に留意しながら、それぞれの地域で今地域の皆さんが一生懸命やっておってくれます。

よく景観条例を作れというようなお話がありますがけれども、私は景観条例なるものは、特に我が村では必要ないと思います。飯田下伊那でも高森と阿智村でやっております。その条例の内容を見ても、これは一般常識の範囲でございます。条例を作ったといってもめんどくさくてあれは見ておるだけでいやになるんですけれども、役人はああいうものが好きでございまして、そして条例を作ったといつてその条例で罰則規定はないわけでございますし、条例の中にもってあることは固有財産を束縛すること。それから個人の営業権まで束縛するようなことがあるわけございまして、そのためにその地域で一部地域で2 / 3以上の同意がないと条例はできないという。その地域で条例ができて、それに対して罰則規定がないということになると、最終的には人と人との結びつき。そしてその地域のこのコミュニティー、これが第一番の基本になるわけでございます。

下條村でもあの不良図書の自動販売、この問題でいろいろ問題がありました。結果的には、地域の皆さんが盛り上がり、そして「あんなものはしょうないぞ」ということ。行政ももちろん指導したんですけれども、行政が指導するとむきになって立ち向かってくる場合があるわけでございますけれども、地域の皆さんの善良なる、そして従順とした説得でやめた経緯もあるわけでございます。

今、リニアのお話もありました。三遠南信の話もありました。まだその安心できる範囲ではないわけでございますけれども、やるのは国では審議会で審議しますけれども、やるのはJR東海と。JR東海株式会社がやるということになると、公共性はもちろんでございますけれども、採算性の面からいくとCルートが5兆1,000億円、Bルートが5兆7,200億円と。そして時間も40分。片方の47分で迂回していく。そしてイニシャ

ルコストもかかるんですけれども、ランニングコストもこのようにかかる。輸送能力が落ちるということになると、株式会社JR東海ということになると、そうそうは簡単にはルートは譲らないと思いますし、その辺を知事は十二分に勘案してやったと思って、知事さんはやってくれたと思っております。

その2日ばかり前に私も出会いました。「どうですか腹の内は」と言ったら退陣を決めておるわけございまして「いや、淡々とやるしか仕方ないですな」と言って、さすがにいい気持ちでまとまったわけでございます。当日も一緒に会議でございましたけれども、私はその前の会議と一緒に出たわけでございますけれども、そんな心境でございました。

やたら規制で縛るんでなしに地域のコミュニティー。そして彼らは、例えば三遠南信ができるということになると、クラスター人口。沿線の人口が230万人おると言われております。東海道ベルト地帯からたった来るだけで長野県の人口220万人、今215万人になりましたけれども、それより多くの人口が見込める。それから東京圏内だと1,200万人のお客さんが見込めるわけでございます。彼らは何のためにそいじゃ信州に来るかということになると、けばけばしいもんでなくて素朴な人情だとか、それから手のつかない自然の美しさとか、そしてまた個性ある、この地域行ったらこんなようなものになっておったな、この地域に行ったらこれはまた違っておった田舎の原風景があるなというのを求めて心の癒しに来るのが大半であろうかと思えます。

そういうことで今、広域の中で今非常に綿密にやっております。観光公社を中心に据えて、そしてそれにだんだん付随しながらレベルの高いものにしていくところでございますけれども、それにつけてもその本当のものを練り上げるには、13市町村の本当の意味での結託がないとできないわけございまして、そうした心の結びつき、信頼関係も大いに醸成してつもりでございます。

それから2番目に、農業の問題でございましてけれども、これは私も相当真剣に取り組んでおります。今、普通のことをしておってこのどうも何とかもうちょっとの方がいいと、こういうことでは言われる方も困るわけでございますけれども、今農業生産横ばいということでございますけれども、JAの総会の資料を取ってみますと、平成18年度には182億円あったものが180億円、171億円、今年にかけては158億円ということでだんだんだんだん減っております。

これはJAも本当に一生懸命やっております。私たち下條村ですらよくやるな、頭が下がるなというほどJAは一生懸命やっておるんですけども、この現実。たった18、19、20、21、4年間で182億円が158億円に減収しておる。これは激減と言ってもいいと思います。しかももう一度言っておきますけれども、JAは本当に企業をスリム化して一生懸命やっておるんですけども、これが現実であるということでございます。

下條村につきましては、私のかかわっただけでも、特異な頑張り方をしておるということをご承知いただきたいと思います。1つは、これは飯田下伊那だけでなしに全国的な大問題でございますけれども、これが解消できないということで、減っていく原因はいくつもあります。今言うように高齢化して、就労者が減ってしまっておるということ。それからこの特にこの地域は、急峻狭隘な地域でございます、林野率は高いけれども、平野の部分は少ないという、非常にハンディキャップを背負っておる中で農家の皆さんも一生懸命頑張っておるということでございます。

特に私がかかわった問題としては、下條村はいち早く圃場整備をいたしました。土地改良を入れまして、親田地区を中心に全村的に圃場整備をやって、そして作業性もよく、そしてコスト競争力もある圃場をだいぶ作りました。

その次にやったのが、石仏団地、果樹でございます、果樹は親田の上段を含めて盛んでございましたけれども、これをまだ産地化して、そして市場原理の中で特色ある売り方をしようじゃないかということで石仏団地。これはできてみればあんなもんでございますけれども、29町8反歩くらいのところをやったわけでございます。これは大英断でございました。

昭和56年ころから始めたわけでございますけれども、この石仏団地を作る時の決断と、それからあの時の反対、今でも鮮明に思い出しますけれども、山田河内の中心部落というのは、あの団地の石仏の下からほとんど飲料水、生活用水を取っておったわけでございます。ボーリングしたりそれから流域、写真屋さんの横を通ってくるあの流域から水を取っておったわけでございますけれども、1つはこうした洞でこうしてここにあるわけでございまして、ここへ大量の土砂を入れることにおいて、これが圧力でも動きゃせんかと。これはもっともらしい論理。

もう1つは、ここから水を取っておるわけでございますけれども、当時は消毒薬も相当

強いのを使ったわけでございまして、それが地下に浸透する。そしてそれが何年後には必ずここへ出てくるはずだということで、私も地元の会合にいつも呼び出されまして、「積極的におまえ反対してくれりゃ困る」だなんて言われたほろ苦い思い出があるわけでございますけれども、それらも克服してやりました。

3番目としては、中原団地でございます。これが入作でございまして、もう地権者がいっぱいおる。そしてもう手が付かないから、夏は盆花の非常に景観的にはいいんですけども、どうしようもない土地でございまして、何とかということでいくつも転びましたけれども、地権者が頑として応じていただけないということでございます。

そこで何がいいか、もう理論ばっか言っておってもしょうない。何が今これで手もかけずにできるものは何だということでいろいろ研究して、そばということに決まりました。そのそば、値段を見ればこれでだいたい役人のやることではこれで終わりでございます。これとても合わないということでございますけれども、合うようにしようじゃないかということでみんなが燃え上がって、村もひと肌もふた肌も脱げということでございまして、「よし村も腰を決めましょう」というところで、これをいかにして売るかということも、付加価値をつけて村が買い取るかということになると、そばの加工場を作らなければしょうない。たまたま私が建設省に行った時に「おい道の駅は南部の方はどうですか」と建設省のある係官から聞きました。「道の駅」というのを初めて聞いて、長野県でも1カ所あるかないかの時でございました。そこでもう名も言っていると思うんですけど、池田総務部長のそこへ行って「こうこうこういうわけだ」と言ったら「よしそうか」と「そいじゃ俺も一生懸命」ということで、土木部を即呼んでいただきまして、ちょうど折しも主要地方道天竜公園阿智線の今の相田のトンネルのできる手前にオープンカットしなければいけない。それをA村へ行くようになっておったんですけども、「それを下條へ何とか入れちゃえ」ということで、大型のダンプ1万1千台。あの地権者の皆様のご了解を得て、あの何にもならないあの谷へ埋めさせていただきました。15cmピッチで、今高速道路作るにも20cmピッチでやるんですけども、そこへまた城を作らなければならぬということで、大変な県でも協力と出費をしていただきました。

そこにそばの城を作ったわけでございますけれども、この件につきましても県もまだまだ行け行けどんどの時代でございましたので、相当手厚い補助をいただいて作ったわけ

でございます。そこでそばを高く買って、一生懸命付加価値をつけて売れば村の出費も少なく済むじゃないかということで今やっておるところでございます。今度もコンバインを入れ替えたり、それからしているいろいろ積極的に今うまい展開になっております。

その次にやったのが、盆花の次は集客を見込んでうまいもの館なんかも作りました。下條村で一番利益上げておるのがあの館でございます、その代わり働くけれども、健全財政の最たるもので今いきいきとしてやっております。

それから地産地消、この流れが出てまいりまして、学校給食なんかはその野菜のほとんどは地産地消で賄っておるわけございまして、これ専業農家も非常に私どもも安心安全のということのおかげに思っております。

平成17年度で三墓地域で、あの地域一等田地でございましたけれども、後継者がだんだんおらなくなってしまう。特にあの長野大学の何とかいう教授が「限界集落」だなんて名前をつけて、「下條村にも1カ所ある」そこで町村会で猛然といたしまして「大学教授に言われたくないと。こっちはこっちでやっている」と。下條まだ1つあったんだでいいけれども、ほかのところはみんな限界集落限界集落。農業も気象条件もあんまり知らんのが「限界集落」だなんて決めつけて大騒ぎして活字にしておるなんていうことは愚の骨頂でございまして、私長野大学というのは上田にあるということを知りませんでしたので、ほかのことで行って講演させていただきました。その時にも学生にしっかり当時は「限界集落」と名付けて誇らしげにおった教授の名前を覚えておりましたので、「こういう先生がおるからおまえさんたちは決してその轍を踏んじゃいかんぞ」ということで言って気持ち良かった覚えがあるわけでございます。

三墓地域、17年にやって今年も相当採れると思う。去年も相当採れました。まさに新しい農業の形。それから適地適作の形で今下條村をやっております。

こうした中で、いくら方向転換し、どうしようとも、そこでユーザーがおらん。買ってくれる人がおらないとどうしようもないわけございまして、そのことについては前々から申しておるように無駄を省いて、そして前向きの投資をして若者を導入し、交流人口を大いに増やす。そして流通を活発にする。そして定住人口の中からその一部をまた若者を中心に定住してもらおうと。交流人口の中から定住してもらおう。若者というのはなかなか消費も盛んでございまして、そうしたにぎわいを見せながらこの施策をやっておるところで

ございます。これに携わった農家の皆さんも、よく頭の転換もしていただいて、前向きにやっておっていただきます。

その証拠として、南部5町村の中で下條村の農産物の販売、出荷比率というのは50%、当時46～47年ころには48%ということを知りましたが、もう50%を切っておると思います。

その中でどうするんだという議論ならばいいんですけども、ただ何とかやってみると。この議論は、そういう議論があったということになしに、適地適作。そしてまた、高齢化というのは進んでいくわけでございますし、農業委員会でも今言うように、就農、新たに就農するということになると、私は売ることは好きでございますが、作ることはできません。できませんというか、いくらか役人の方、かたくれのようなことは覚えておりますけれども、できませんので。農業委員会の皆さんもそういう方向で適切に。

それからまた地域にはおもしろいものでございまして、入ってきて誰かにその人がするとすがる人はもう喜んで教えてくれるということでございまして、「一堂に集まれ、これはこうだ」と言たって頭に入らないと思います。ここではキュウリを作っておるな、あのところではタマネギ作っておるな。「俺もやってみたいが、おいさんどうだ」と。これが本当の意味での新たに就農する人が方向を定めるには一番いいことではないかと思っておりますので、そんな面で村は支援できること。

それから1つ辛み大根、これも大特産品でございます。峰竜太さんもなかなか一生懸命PRしておってくれます。今、大きな予冷庫も作りました。それべくの支援もしておるわけでございますけれど、私はあれを今度言いますけれども、信大でエフワンの趣旨も村で一生懸命やって作りました。いい品質ができます。これをもう少しあそこで1～2年営業活動。これも今までの売っておるシェアがあるんですから、そこからあまり近いところでは駄目ですから、そこから外れたところで何かツテを頼って、今は営業しなくて自分だけの周辺を囲って、そして手を組んでおって売れるはずはないわけでございます。今もしっかり売れておりますけれども、さらにもう少し営業活動をしてもらう。農家の皆さんの一番欠点は、作ることを命だと。売ることはそれは別に農業やるんだとかということの、これは今までの国の施策の弊害でございまして、自由経済社会の中で販売面になると統制経済社会のようなことやおったわけでございますし、もともと米作りというのはあれ統制

経済の産物でございます。一概には言えないんですけども、そういう形があるわけでございます。

それから売って売り抜けて、そうして再生産意欲のあるような適正利潤を手元に置くということが、これが繁栄の基礎でございます。

それと何でも集めてやればといいということでもなしに、さっきも言ったように新就農者、その人のやはりこれからそこに生きていくということになれば、地域の皆さんと親しくしなければいけない。これ第一でございます。親しくして「おいさんどうだ、これおばさんどうだ」1回聞けばわかるような問題でもなしに、こういう状況が起きたときにどうするかというと、地域に溶け込んだ生活態度、そしてまたよりコミュニティが広がるような方策を村でも助長し、またその指導は農業委員会の皆さんにも今常々お願いしておるし、今やっておってくれますけれども、さらに推進するようにしていくつもりでございますので、ご理解いただきたいと思っております。

答弁終わります。

議長（村松 積） 3番、金田憲治君、再質問ありましたら。

3番、金田憲治君。

3番（金田 憲治） 1番目の問題なんですけど、今答弁の中で景観条例はやらないと、こういうお話だったと思います。

私も景観条例を作るまでもなく、いろいろそういうものが保たれればそれで十分だというように思いますが、ただこの中でやっぱり植物はその地域にあったところで育つものが非常にやっぱり一番いいだろうと思っておりますので、そういうものでいいものがあれば、そういうものを中心にして、これからそういうものを広めていって、そうするとあるグループがそのとこ植えたりいろいろするということのようなことができくんじゃないかなと。そういう1つの何か方向性なみたいなものを、こういうふうの研究してもらえないかというように感じます。

それから農業の方の推進なんですけど、もう私の回りにも退職してきて、機能塾へ行ったりいろいろ、こうやって本来自分でそういうとこへ出てかないとなかなか身につかないとは思いますが、例えば私ごとになりますけれども、私の妻も全然農業やったことなくてこっちに来た。いろんなおばさんに聞いたりいろいろして今農業をやっておるような

ところでございます。

何とかその今のその農議連とか、またはその農協、それから農業委員会、そういうものが中心になって、例えばさっき言われたように親田大根なら親田大根の圃場についてこういうものをこうやっていますよという、基礎的なものをこういうふうにやってくれるようなそういうものがあれば参加したいというようなものも結構おいでになりますので、その辺、簡単なものでそういうような講習会ができないかどうか。その音頭を、村の方で行政の方で少しとっていただけないかということでございます。

以上です。

議長（村松 積） 伊藤村長、答弁願います。

村長（伊藤 喜平） 前の質問がわからんですけれど、この地域にあった作物があると。どういう意味で。

3番（金田 憲治） 景観の方は、ここの地域に育って地区にあったものがありますので、そういうようなものを全体として統一した、そういうなんか地域を景観を形成していくんでしょうか、そういうようなところでこういう植物はいいですよ、こういうものをこういうところへ植えると非常に良くなりますよとか、そういうような1つの指針というんでしょうか、そういうようなものを全体で統一したらどうでしょうかというこういうことだったんですか。

村長（伊藤 喜平） 先ほど景観条例は作らないというんですけれども、作らないんでなくて作っても意味がないなということで、これは広域の中でまた大いに検討するもの。

それから今のおかしい。都会から来る皆さんは、作られた景観よりも素朴な手のつかない自然というのが割と好むし、それがこの和むところでございます。

そういうことでございまして、手を付けるべきもはつける。そして花を植えるということとはもちろんいいことなんですけれども、そこへまた杉を植えても檜を植えても、そういうその多様性のものを私は好むんじゃないか。あまり手を入れすぎたんでなくて、あまり作りすぎたでないものもいいじゃないかというふうに、だいたいの方向はそうでございます。

あまり行政が必要以上にタッチするというのも善し悪しでございます。新たにこれから農業をやるということの人でも、何か作ってみればそれなら俺は参加すると。これはも

う今の時代は通らないということをごさいますて、それは何十日でやるということでないわけをごさいますて、私が言ったように適地適作、ユーザーに対してユーザーは何を求めておるか。これは小ロットでも他品種でもいい。今直売所の機能保っております。今大量出荷して、市場原理で市場経費、予算25%も28%もとられてしまって、そしてやったら実入りがほとんどなかったということの流通形態というのはだいぶ変わってきております。スーパーに置いてもそうをごさいますて、スーパーで直接圃場をもって圃場と契約して、市場を通さなくてやっておるなんていうのは普通のことをごさいます。そのときにまだこれからやる人はどっか行って役場へいきゃ何かをなるわけなしに、さっきも言ったように、地域に根付いて、そしてケースバイケースで指導を受けていかなければならないということと、ごく最近5月31日に農協のトップが5~6人そろって来てくれました。そして果樹、先ほど申したように石仏団地、大量生産やったんだけど、どうしても赤梨はもう限界だということで、農協と話した中で、農協も「そいじゃ村行って一緒に話すま」と。私どもいろいろ聞いておってみて、なぜその限界かということ、出荷時期が気象の変更でだいぶ同じになってしまった。赤梨の全国的に。今良いということになるとどこでも作るわけをごさいます。ドカーンと出ちゃって、これは駄目だと。そして南水は非常に良いんですけども、南水は袋掛けから何からで非常に手間がかかるそうをごさいます。

林檎は、林檎の津軽、早出し、これは有望であろうということと、ブドウ、今の皮さら食べれる、種なしに皮さら食べれる、これが非常に今有望だと。

それから林檎では、シナノスイートだとかシナノゴールドというようなものも有望である。それからもう1つは柿、これは金にならんのですけども、柿はいくら作ってくれても結構をごさいます。大いにその作るのは結構なんですけれども、流通過程で引っかかる。いろいろ引っかかるわけをごさいますけれども、そんな提案もいただきました。

あなたたちは検討ばっかしておっちゃ駄目じゃないかと、すぐやりましょうと。それにはまず誰かパイロットを仕掛け人を作れということをごさいますて、農業、栗でもそうをごさいますけれども、4年くらいかかってやっとなるわけをごさいますので、そのやる「俺はやるぞ」という人に対して、農協もしっかり面倒を見ろと。村のそういうやる気のある、今の言ったような品目を中心にやる。やってみたら良かったぞということやればいいいわけをごさいます。何も統計を見たり決算書を見てブーブー言っておることなくて、アク

ションを起こす。一步踏み出す勇気をお互いにやりましょうということで、5月31日には希望を持って帰っていかれました。下條村でも4～5人はやる気になっておる人があるわけですので、そうした皆さん、とにかくパイロットでやってみてくれということでやっております。

私は私なりに、血のにじむような努力は当然しなければいけないんですけども、これからは農業の一番いけなかったことは、長い間の中で失礼ですけども、あの米作。これはもう国が復興していくためには米を安定的に供給してくれたというのありがたいんですけども、あれ国策として間違っておったというのは、だんだんに方向を転換してやらなければいけないんですが、際まできてばかんとやるようなことをしておるわけでございます。

売って作ってなんぼも大事です。これはもう基本でございますけれども、売ってなんぼ。これも大事でございます。下條村の中には、その売り方で非常に売ると良いものを売るということを主眼に、そこからどうあるべきかと。こういう計算をきっちりして今成功しておる事例があるわけでございますけれども、ちょっと規模が大きすぎてなかなかみんながまねできないということで、中規模でも小規模でもいいというテストパイロットをこれから育成していくということでございますので、依存、自分で自ら汗をかいてみると。そういうものに対しては、そういう人に対しては、村もしかもJAもしっかり出してくれるということで決意は固いようでございますので、そういうふうな理論武装だけでなしに、実践でやっているということでご理解いただきたいと思っております。

議長（村松 積） 3番、金田憲治君、よろしいですか。